

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 霊と言

## ——マタイ伝第4章1～11節——

1993年4月4日

小池辰雄

一対一の伝道 破れ砕け キリストの突破突入 断食 霊言 キリストの言に圧倒 霊言を食らう ご利益信仰ではダメ 我が本願道を行け

## 【マタイ4】

1ここにイエス御霊みたまによりて荒野あらのに導かれ給うたま、悪魔に試みられんと為るすなり。2四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。3試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』4答えて言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡てすべの言ことばに由る』と録されたり』5ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上いただきに立たせて言う、6『なんじ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんじの為に御使たちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち当つること勿らしめん」と録されたるなり』7イエス言いたもう『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』8悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とを示して言う、9『なんじ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』10ここにイエス言い給う『サタンよ、退け』主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事え奉るべし』と録されたるなり』11ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事えぬ。

## ●一対一の伝道

今の若い人は求めがない。語っても、その反応がない、感激性がない。それくらい、魂の世界からは離れている。今の青年には本当に望みが持てない。これは青年諸君に責任があるわけではなくて、小学校からの教育がダメだからです。先生方がそういう世界を持っているから、魂の育てができない。教育者自身が、小学校から大学にいたるまで、その点がほとんどダメなんだ。本当に情けない。「宗教は後生願ごししょうい」くらいに思っているが、冗談じゃない。毎日の生活の原動力なんです。ミッションスクールの先生方も本当につかまえていないから、結局ダメなんだ。

ですから、あなた方一人ひとり是非常に使命がある。とにかく、誰でもいいから、「この人は」



という人に本当に語って一対一の伝道をすることです。あなた方は一対一の伝道をする使命をもっていますから、そういう魂にでつくわしたら、一対一で本当に語ってやりなさい。

### ● 破れ砕け

我々の現実**は破れ**です。誰でも破れている。人間はみな破れの存在です。誰でもみな欠点をもっている。また、エゴイスト、自己中心です。それが**砕**ける。

「砕けたる魂は神さまに喜ばれる」

と、詩篇51篇にあるけれども、あの砕けは、人間の魂が、心が砕けたくらいでは、本当はダメなんです。この砕けはキリストの砕けなんです。

「十字架の痛み」ということを北森氏が書いた。けれども、キリストの十字架は「痛み」ではない。「砕け」なんです。イザヤ書53章に、

「神の僕の砕けによって救いがくる」

と預言してある。キリストが十字架に懸かったのは「十字架の砕け」なんです。

「お前たちのエゴイズムは全部、私が引き受けた」

と。「罪の贖い」とはそういうことです。「罪」というのは我々が自己中心であるということ。

「この言葉、この行ないが悪いの善いの」

なんていうことではない。

「我々はエゴイストである」

ということが「罪びと」ということです。

「万人は罪びとなり」

とはそのこと。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言ったのはそのことです。

「お前たちの罪を全部引き受けた」

というのが十字架です。無の世界に入れた。根源の現実では、我々は罪はない。本当に十字架を受けとれば、自己中心が本当の根底では消えている。

相対的な人間小池は相変わらず自己中心があるでしょう。しかし、その奥に、もうそういうものをすつ飛ばしているところの、根底の無の世界がある。無私の世界が、私の無い世界がある。

これは十字架がくださったのであって、自分で悟って無になったのではない。よく、「無」というと、禅宗のような「無の悟り」かと思うが、そうではない。禅宗の無の悟りの世界は大変ですよ、人間は無になり切れない。本当に無をもっているのはキリストだけです。私無きひとはキリストだけ。完全にキリストは「無者」だから、

「無者キリスト」



と私は言っている。世界中で誰もキリストのことを無者なんて言わない。無者キリストだから、完全に神さまが入ってきた。だから、

「我れを見し者は父（神）を見しなり」と言える。

そういう砕けはキリストの砕けを賜る。我々が砕けたって、それはたかが知れている。十字架は賜りたる砕けの世界です。そうすると、そこは無なんだ。そこには聖霊が入ってくる。

### ●キリストの突破突入

「突破」というのは我々が突破するのではない。キリストが突破して入ってくる、突入する。これはみなキリストのわざです。キリストの突破突入に応えれば、キリストの聖霊が突破突入してくる。こちら側の突破突入もあるでしょうけれども、我々の側からは本当は突破突入なんかできやしない。これが本願の劫力ということですよ。

一遍がその世界を本当につかまえた。「南無阿弥陀仏」そのものが私を完全に救ってしまっているのです、こちら側の信仰がどうだこうだではないと。信仰なんか問題にしている。阿弥陀さんが、お釈迦さんが億劫の世界を悟り開いたその時に、既に救いは来ている。十字架にキリストが架かった時に、それで我々の罪は既に贖われている。

### 「未だ罪びとである時に、既に救いは成った」

とパウロが言っている世界です。こちらの信仰が何か問題なら、どうにもならんですよ、我々の信仰をサムシングだと思つたら。

「信仰に絶しろ」

ということですよ。絶すると上からの信が入ってくる。これが本当の信仰だ。普通はみな

「私の信仰はまだ薄いから…」

なんて思う。キリストが

「信仰薄き者よ」

と仰るものだから、あれは躓きの言だよ。自分の信には絶信すればいい。そんなものは当てにならない。信仰なんか当てにならない。だから、

「私は信仰なんかありません。ただ、信は上（キリスト）からやってきます」

と言う。これが本願の劫力です。その世界にこないかね。

十字架を受けると、キリストが突入してくださる。キリストの突入は即ち聖霊です。こちら側の信仰そのものを問題にしたって、はじめられない。人間の信仰なんてものは当てにならない。だから、もう開け放して、あるがまま。そうすると、グーツと入ってくる。これがキリストの砕け、キリストの突破突入です。みな上からです。これは必ず入ってくる。開け放すこともできなければ、そのままでもいい。キリストの方から開けてくださる。

エレミヤの言に、神さまに向かつて、



「あなたの方から帰ってきてください」という言がある。

そうすると、キリストが、聖霊が内住してくださる。常燃してくださる。みなこれはキリストです。そして、キリストが担い抱いてくださる。棄身の存在にしてください。これが一遍上人の世界です。捨聖すてひじりという。我々はいろいろなものを有もっているけれども、有もっているなんて思ったらダメです。

「何もありません。預かっているだけのななしです」ということです。

そうすると、キリストの栄光が現れる。こちら側には何も無い。けれども、何も無い人をその人らしく、キリストの方から現象する。その現象は一人ひとりみな違う。その人その人らしく、キリストの栄光が現れる、キリストの力が現れる。

十字架を本当に受けければ聖霊がくる。十字架の土台のない聖霊なんてものはあぶない。十字架と聖霊は離すことができない。

## ●断食

では、マタイ伝4章に入ります。1節から14節、

1ここにイエス御霊みたまによりて荒野あらのに導かれ給たまう、悪魔に試みられんと為すなり。2四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。

「御霊によりて荒野に導かれ給う」

とある。キリストが受洗したら、聖霊が鳩の如くに臨んできた。キリストは聖霊をもちろん宿している方です。霊的な者は、悪霊がそれを襲いにやってくる。霊的でない人には、あまりそれをやらない。高次な霊の人には悪魔がやってくる。ヨブ記にも書いてある。悪魔がヨブを試みようと思つて、神さまに

「ヨブを少しやつつけていいですか」

と言うと、神さまは

「生命はとるな。けれども、やるだけのことをやってみろ」

と。それからヒントを得て、ゲエテが『ファウスト』を書いて、メフィストーフエレスがファウストをいろいろと誘惑したりした。

「四十日、四十夜」というのは、「四十」という数はよくでてくる。モーセが山に籠こもった時も「四十日、四十夜」です。そして十誠を賜るわけです。単に形容したのではなくて、これは正直「四十日、四十夜」です。

「断食」は、修養の時に時々断食する。それは断食して忍耐を学ぶということではない。肉体的なものを食べないということは、逆に、霊的なものを飲み食かべることになる。食べ物は食べないけれども、上からの霊的な糧かてを食べる。我慢するのではない。別な霊的なも



のを魂が食べる。肉体はいろいろなものを食べるが、霊は霊の糧を食べなければいけない。

### ● 霊言

今日の題に『霊と肉』と書きましたが、神の言、神言は、ヨハネ伝1章1節に

「**太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**」

とあるとおり、言は神的なものです。言は、神言は既に霊なんです、**霊言**なんです。聖書の言はみな霊言です。実は、霊と言は二つではない。霊と言は離すことができない。聖書の言が素晴らしいというのは、みなそれは霊の言、**霊言**だからです。神の霊が人間にわかるように表わしているのが言なんです。あの

「**太初に言あり**」

をゲエテが『ファウスト』の中で、

「**太初に行為あり**」

と訳した。さすがはゲエテだ。これは言行一如になる。人間の言葉は空の言がしばしば多い。けれども、この言は行に裏付けられた言でなければダメだ。

「**わが言は霊なり、生命なり**」

とキリストが言われた。キリストが、

「**癒えよ!**」

と云えば、キリストの言は霊であり力をもっているから、病人が治ってしまう。王の近臣の死にそうな子に対して、ずっと遠くにいるのに、キリストはいきなり、

「**汝の子は生くるなり**」(ヨハネ4・50)

と言った。ということは、キリストは祈りの世界で、祈りが行的な力をもっているから、遠くにいる子が治ってしまった。イエスというひとは大変な**霊止**です。

お母さんが息子の**柩**の側で泣いていた。キリストは**柩**に手を置いて、

「**起きよ!**」

と言ったら、死人が起き上がってきた。死人まで**甦**らせるようなひとだ。

### ● キリストの言に圧倒

だから、福音書を読んだら、その中に自分を投げ入れて、そしてキリストの言に圧倒されなければダメです。ビリビリと何かが来るような読み方をしないと。意味ではない。力ある現実なんです。いくらギリシア語ができたって、ヘブライ語ができたってダメだ。日本語で結構です。その奥の神の根源語の響き、力を受けとるかどうかが問題なんだ。これはやはり十字架を土台とした**聖霊**の世界に入っていないと、その読み方ができない。「**眼**光紙背に徹する」というのはそういうこと。言の奥の世界です。

「**太初に言あり**」



というのは、キリスト自身が言なんです。実力ある言です。だから、キリストの発する言が同時に、

「言は神なりき」

というのがそのこと。あの「神なりき」というのは「神性を持つている」ということです。その言は神言しんげんであるということ。

私も頭でものを言つてやしない。そういう世界であなた方にものを言つている。あなた方もその世界で聴いていないとね。

「どういう意味か？」

ではない。

「どういう現実か」

ということをビリビリ受けとつていかないとダメです。

### ● 霊言を食らう

断食は神さまの霊言を食らうこと。キリストはまさにそういった意味で断食している。神の霊言、聖霊を食らうと言つたつて構わない。モーセもエリヤも断食した。

3 試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパン

と為らしめよ』4 答えて言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、

神の口より出づる凡ての言ことばに由る』と録しるされたり』

「人の生くるは

肉体はパンで生きます。ところが本当の生命いのちは、「神の口から出づる凡ての言ことばに由る」と。だから、神言を私たちの魂が食らわなければ、本当は生きてはいえない。そこらの動物と同じになってしまう。人間は神の霊言を、霊を——言即霊、霊即言——それを受けとつて生きている。聖書の言はそういう言なんだ、意味ではない。だから、言の現実の中に、ドラマの現実の中に自分を投げ入れていかなければ。その中に吸い込まれる。研究して入れない。

「神の口より出づる凡ての言ことばに由る」

というこのキリストの言は断然たる言です。神さまの言はむだがない。だから、聖書の霊言を、聖書を読んで力を受けとらなかつたら、本当は読んでいるとは言えない。食べているとは言えない。

「我を食らえ、我を飲め」

とキリストが言った。福音書を読んで、キリストの行為、キリストの言行を本当に食べて飲んで力が来なかつたら、実は福音書を読んでいるとは言えないということになる。そういう、現実のドラマの世界です。

だから、霊と言ではない。霊言れいげん、一如なんだ。霊が現れては言となり、言の奥には霊がある。



「ことだま言霊」という言葉もあるとおり。

### ●ご利益信仰ではダメ

5 ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上いただきに立たせて言う、6 『なんじも若し神の子ならば己おのが身を下に投げよ。それは「なんじのために御使みつかいたちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足を右にうち当つること勿なからしめん」と録しるされたるなり』

これは旧約にある言を持つてきたわけだ。ところが、

7 イエス言いたもう 『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』

あの詩篇の言は、それだからといって、ご利益りやく的にそれを使おうなんて思ったなら、それは神を試みることになって、とんでもないはなしだ。それはご利益信仰だ。神さまが本当に、「お前をそこに投げ入れろ」

と命ぜられたら、投げ入れればいい。

「死んでもかまわない」

と、それだけの気持ちになったら、神さまの方で救ってください。

「ご利益信仰ではダメだ。神さまを試みるとは冗談みじかじゃない」

というわけです。御意みこころに従うことはいいけれども、勝手に

「それでは私はやってみよう」

というのは欲である。神さまを試していることになる。とんでもないはなしだ。それは自分が怪我する。ヘタすれば死んでしまう。

### ●我が本願道を行け

これは仏教もキリスト教も同じこと。結局、本願に従うかどうかということ。 「本願」というのは、神さまの聖意、神意、神の御意みこころです。御意を受けるときには、こちらは無でなければダメです。自己が立っているうちはダメ。平伏ひれふしのすがたです。平伏しにおいて御意をうけたまわる。

親鸞が法然を信じて、

「法然の言なら、たとえ地獄に落ちても構わない。とにかくそれに従っていこう」と、親鸞はそれくらいの気持ちでいた。

「地獄か極楽か、我が存知せざるところなり」

なんて言っている。救いを求めている。聖意みこころに、本願に従うかどうか、それだけの話だ。

十字架によって無とされるから、十字架によって置かれた無の世界に入ると、これを受けると同時に力が来てしまう。だから十字架の無が聖霊の無限無量に通ずる。「無即無限無量」というのはそのことです。この無は虚無ではない。本当の無の世界に入ると、即、



無限無量を展開していく。この無は凄い無なんだ。ありがたいね、圧倒されるから。無限無量なものがこちらへ入ってくる。

8 悪魔またイエスを最高山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とを示して言う、<sup>9</sup>『なんじ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』  
 10 ここにイエス言い給う『サタンよ、退け』主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事え奉るべし』と録されたるなり』<sup>11</sup>ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事えぬ。

聖意、信従である。聖なる意志に信じ従うこと。まさにこれは他力本願道です。

「他力本願道でいけ」

と。他力本願は救いのためではない。本願に従うことそれ自身がすべてだ。結果はどうかは知らん。救いを目安としていたらダメなんだ。それは本当の救いではない。よく、

「救われました」

とか、「救われます」とか、すぐ救いのことを言うけれども、結果の問題ではない。従うことそれ自身が神の栄光の現れとなる。「救い」というよりも、

「神の栄光の現れ」

と言った方がいい。神・キリストに従うと、その人を通して神・キリストの栄光が現れる。あなたの方のなされることは何でもそうだ。栄光が現れるのであって、「救われる」とか「救われた」ということではない。

「サタンよ、退け！」

とは、

「自己中心な」<sup>2</sup> 利己的な考えから抜ける。そんなものに従わないぞ」

ということ。要するに、自己中心は全部、サタンの手下になる。人のために本当に尽くしている、マイナスのようだが、本当は大きな天的なプラスがきている。そういう人は滅びない。我々の福音の世界は本願道なんです。本願の道です。

「我は道なり」

とはそのことです。

「我が本願道を行け」

ということ。神の願いが成ることが最善のこと、最も素晴らしいことだ。

キリストがサタンと一騎打をなさった時の、キリストのすがたは結局、神の御意と神の力によっていて、自分の何かではひとつもない。キリスト自身が神さまの前に平伏して、神の霊で戦っている。聖霊を私したらダメです。

「我を通して能きたもつ」<sup>3</sup>

というだけのはなしです。そういう本願道の烈々たる現実でもって我々は生きていかなければね。

